

ダラスのワーキング女子へエールを！ JCWのマンスリーメッセージ

誰もが心地よく 過ごせる空間へ

今月は、身体に障害のある方も安心して使えるためのデザイン規制 American with Disability Standards (ADA) についてお話したいと思います。皆さんが日々から使う建物たち、例えば会社、家、公共施設など。私は内装デザイナーの仕事をしている関係で、建造物を建てるにあたってさまざまな規制を知る必要があります。そして、その規制の知識は建物の内だけにとどまりません。例えば、お店には何台の車を駐車できるようにしなければならぬ、といった内容も知識として知っておく必要があります。

建物の内部に目を向ければ、車いすの人が動きやすいように廊下の幅やお店のレジカウンターの高さなども、実は規制で決められています。車いすだけではなく、目の見えない人、耳の聞こえない人も安心して建物を使えるように、さまざまな規制があります。普段は気に留めないけれど、実は「誰でも快適に使える空間をつくる」という配慮から細やかな工夫が凝らされているのです。

そもそも、なぜADAが存在するのでしょうか。この基準は、1988年にアメリカ全土での議会で最初ドラフトが可決されました。最終的に人権法となったのは、1990年です。この法律は、身体障害を理由とした、雇用・交通・公共サービス・電気通信・公共の宿泊施設・公共施設における差別は違法と定義するものです。後に、ADAは2008年にいくつかの修正が行われ、現在のADA Amendments Act (ADA Amendments Act) となりました。

では、具体的にどのような規制があるのでしょうか。皆さんが日常の中で目にしていてるものをいくつか挙げてみます。まずは駐車場。多くの方が、車いすマークのある駐車スペースを見かけたことがあると思います。この駐車スペースは、歩道に移動する際に段差がありません。これは、車いすでも建物へたどり着きやす

くするためのものです。

次に建物の入口を見てみましょう。自動ドアや、ボタンで開くドアをよく見かけますよね。もし自動ドアでない場合は、ドアを開ける時に必要とする力の制限が実はADAで規制されています。これは関節炎で取っ手をつかみにくい方や、腕の力が弱い方にとって大切な配慮です。

建物の中に入ったら、まず廊下を通りますよね。車いすに乗っていると廊下の幅や角を曲がるためのスペースが必要になります。この床面積も、車いすの方が快適に動けるように設定されているのです。

そして受付まで進むと、カウンターの高さにも規制があります。高すぎると車いすからは見えないので、カウンターの高さは34インチより低く作るように定められています。立っている人には少し低めに感じるかもしれませんが、車いすの方にとっては必要不可欠な工夫なのです。ホテルや会社の受付カウンターに段差があるのは、利用者に応じて高さを変えているのです。

次にトイレです。トイレには、手すりの位置・車いす用の個室のサイズ・便座の高さなど、細かい規制があります。

このような決まりがあるおかげで、身体が自由が限られていても、多くの人が公共施設を安心して利用できるのです。デザイナーとしても、規制の中でいかにおしゃれで機能的なデザインをつくるかが課題になります。

ここまででは、主に車いす利用者の視点でお話しましたが、目が見えない方のためにも工夫があります。例えば、杖を使って歩いているときに安全に移動できるように、壁から4インチ以上突き出しているものは床から27インチ以下に設置されます。そうでなければ杖で感知できず、頭をぶつけてしまう危険があるからです。また、80インチの高さまでは4インチ以上壁から突き出したものを設置してはいけないというルールもあります。

さらに、オフィスやホテルの部屋番号には点字がついています。これは誰でも自分の行きたい場所に自分でたどり着けるようにするためです。

耳の聞こえない方への配慮もあります。ホテルの客室の外にはボタンがあり、ボタンを押すと室内の電話が点滅する仕組みになっていることがあります。これもまた、見えにくいけれど大切な工夫の

一つなのです。

このようにADAでは、細かな規定を設けています。内装デザインといってもさまざまな決まりを守る必要があります。違反すると大きな問題になります。州や都市、町によっても、その内容は少しずつ異なります。そのためADA以外の建築基準法についても知識が必要です。

特に重要なのは、出口の確保です。火事の際にいかによやく安全に避難できるかが大切であり、その逃げ道を車いすの人の見えない人、耳の聞こえない人も安全に使えるように設計する必要があります。

ここ最近では、法律で定められていなくても「あると助かる空間」も増えてきました。その一つが授乳室です。会社によっては「Lactation room」や「Mother's room」とも呼ばれ、授乳だけでなく体調が悪い人が休めるスペースとしても使われています。

最低限必要なのは、コンセント・冷蔵庫・ソファや椅子・サイドテーブル、そしてできれば水道とシンクです。さらに間接照明や観葉植物があると、安心して過ごせる雰囲気になります。授乳室が普及する前は、母親たちはトイレや倉庫などで授乳ポンプを使っていたと聞きます。このような授乳室は、今では空港やショッピングモールにもよく見られるようになりました。普段は気づきにくいけれど、一度意識すると目に入ってくる空間です。

ADAで義務づけられた規制から、社会の必要に応じて整えられてきた授乳室まで。多様な人々が訪れる空間では、誰もが安心して使えるように環境が少しずつ変わってきています。普段は何気なく通り過ぎる場所にも、実は「どのような事情を持つ人にとっても快適であるように」という想いが込められているのです。

ぜひ、空港や公共施設に行く機会には、少し意識をして見てみてください。Lovefield Airportには授乳室もあります。普段は見えないけれど確かに存在する工夫に気づいたとき、空間の見え方が少し変わるかもしれません。そしてその気づきこそが、これからの社会をよりやまゆり豊かなものにしていくのだと思います。

プロフィール

JCW (Japanese Career Women)
2018年に発足した、ダラスに本拠地を置くNPO法人。ダラス、そしてアメリカ・日本・海外で働く日本人女性やワーキングマザー、学生達を応援し、ネットワークの場を提供するため、毎月様々なイベントを主催している。
メールアドレス: ajcwwomen@gmail.com
ウェブサイト: ajcw-shines.org